

## 両足院本『東坡集』について

吉井 和夫

京都禅林五山の一つ、建仁寺の塔頭両足院に蔵せられる宋の蘇軾（東坡居士 一〇三六—一一〇一）の文集『東坡集』一百十一卷については、先年展覧に供された折の調査にもとづいて口頭発表を行ったことがある。その後、両足院の許しを得て本書全冊の撮影を完了し、前回はたしえなかった更に詳細な調査を行うことができ、その結果はすでに論文として提出中である（『中国学論集』所収 年内刊行予定）。今回の発表はそれらに加えて、実際に本書を使って通行本との文字の異同を、殊に釈教類について検討したものである。

まず書誌的事柄を簡略に記しておく。

一百十一卷。うち目録と本文五十三卷を存す。十冊。刊本。左右双辺。匡郭、縦一七・八釐、横一二・一釐。每半葉大字十四行、行二十六字。小字双行。有界。版心白口。單魚尾。「東坡 幾」とあり、その下に葉数を記す。内題・目録題・尾題ともに「東坡集」。目録と本文の一部に朱点が入るが、識語はなく、印記は「両足院」のみ。文中の語が宋室に遇う毎に、上一格乃至四格をあげる。欠画は「弦・敬・殷・完・構」に及び、「慎・敦」を欠かぬところから、原刻部分は南宋高宗朝のものと考えうる。ただ補刻の迹が認められるので摺印時期は南宋の末頃であろう。刻工名は「祖二」「夏」「順」「單」「餘」「長羅」「念三」「百九」「茨三」「蘇三」「袁永」「酉師」「召二」「長二」等が見えるが、他書に見出せず、

この方面から刊刻時期と場所は導き出せない。ただ顔真卿、柳公権の書体を兼ねるといわれる蜀刻宋版小字本の特徴をそなえているので、本書も蜀版ではないかと推察しうる。

次に本書の持つ特長として二点を挙げたい。一つは『東坡集』の版本系譜上にしめるユニークな位置であり、一つは文字校勘にはたす重要な役割である。

まず版本についてであるが、宋代から影しく刊行された『東坡集』は、体例上から見て、大きく二つの系統に分けることができる。「東坡集（前集）」「後集」など最終的に七つの集に分けられている所謂「七集本」の系統と、それらの作品を合わせて類ごとに分けられた「全集本」の系統である。この「七集本」の系統は東坡の生前から編集されはじめられたもので、明代に現在の形となり、以後清末の宝華齋刊本などに引継がれ通行本として今に至っている。いわば『東坡集』の正統的なスタイルをとるものといえよう。そして現在もお明の成化四年刊の足本はもとより、よりオリジナルの南宋刊本も幾種かが現存している。これに対して「全集本」は書目書誌の類に宋刊本があったことは記されているものの、現存はしていないものとされてきた。ところで本書はその編次を見て明らかに、この「全集本」の系統に位置づけることができ、それゆえこの系統における唯一の宋刊本と目され、その発現は『東坡集』の宋刊本に新たに一種を加えたにとどまらない価値を有しているといえよう。

また本書は目録が完存しているので、今まで知られていなかった宋版「全集本」の編次と収載作品をつぶさに知ることができる（明版の「全集本」は宋版「全集本」の翻刻ではなく、同じ明版「七集本」にもとづいている）。その結果、本書には宋版「七集

本」所載作品以外に、論四種、邇英閣進読八首、評史二十八首、雜評二十首、説二首が加えられていることや、「前集」「後集」で分類が異っているなどして合編しづらい場合でも、きわめて穩當に処理していることが判明した。ともすれば「全集本」は『東坡集』に限らず、坊刻の杜撰さが問題にされるのであるが、本書はその内容と編纂の妥当さにおいて、信頼のおける刊本とみなすことができる。

次に本書の文字校勘にはたす役割であるが、前述の通行本に文字や編集上の誤りが多いことについては、多くの先人の指摘するところである。そこで当然宋版による校勘が不可欠となってくるのであるが、現存する宋版『東坡集』には欠けているところが多く見られる。すなわち「後集」卷十二・卷二十、「内制集」「応詔集」がそれである。ところでこの部分を兩足院本と比較してみると、「内制」「応詔」は兩足院本も佚しているが、「後集」の九卷に収める表狀劄子・疏文・啓・書・記・碑・伝・祝文・祭文・墓誌・神道碑・釈教の類はすべて存していることが確認できる。つまりこの部分、二百三十九編の文は、本書によりはじめて宋版との校勘が可能になったわけである。

以上、版本と校勘という大きく二つの面から本書を見たわけであるが、次に実際に校勘をした結果についていくつかの気付いた点を挙げてみたい。

今回は特に卷一百九・卷一百十一（七集本）では「前集」卷四十「後集」卷十九、二十に当る）に収める釈教類について見たわけであるが、まず卷一百九の「真相院釈迦舍利塔銘」に見える二字の異同については、最近中国の長清県の同院址から出土した蘇東坡の書跡（拓本）と比較したところ、やはり宋版の字が二字と

もに正しいことが判明した。また同巻の「大悲閣記」の下に「成都大慈寺」の注記があり、これは通行本はもとより、他の宋版にも見えぬものである点、注目したい。

さらに卷一百十・一百十一の二巻については、宋版が兩足院本のみで簡所であるが、それぞれ三十五箇所、四十三箇所も字の異同が見つかった。これを字数になおすとさらにふえるわけである程度予想されたこととはいえ、やはりその違いには驚かざるをえない。その中には所謂魯魚の誤りも混っているわけであるが、例えば卷一百十の「水陸法像讚」のように、序文の後に通行本には無い「元祐八年十月六日」の日付が記されているところなどは、伝記資料としても注目に価すると思われる。蘇東坡はこの年の八月に妻王氏を、さらに九月には彼を含め旧法党を擁護していた太皇太后を失ない、十一月には王氏のために水陸会を設けて供養をしている。この賛文がその約一月前に著されていたことは今回の調べではじめて明らかになったことであり、その記されている水陸会がどのような状況の下に設けられ、誰のための供養であったかということなどについて、その研究に資するところは大きいであろう。また卷一百十一の「藥師琉璃光佛贊」では五六字がそっくり入れ替っているなど解釈上重要と思われる文字の異同だけでも枚挙に遑がないほどである。

このように兩足院本『東坡集』が校勘上、質量ともに多くの問題を提起しうる存在であることは明らかである。私はまず本書でのみ可能な部分の校勘を急ぎ、これを学界に明らかにすることがこれから課せられた仕事であると考えている。またそれが、鶴首して待たれているすぐれた『東坡集』の定本作りに、いささかなりとも助力になればと思う次第である。